



Title	ダトーガ語（バジュータ方言）の子音体系について
Author(s)	稗田, 乃
Citation	スワヒリ&アフリカ研究. 1998, 8, p. 81-94
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71091
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ダトーガ語（バジュータ方言）の子音体系について¹

稗田 乃

1. 序

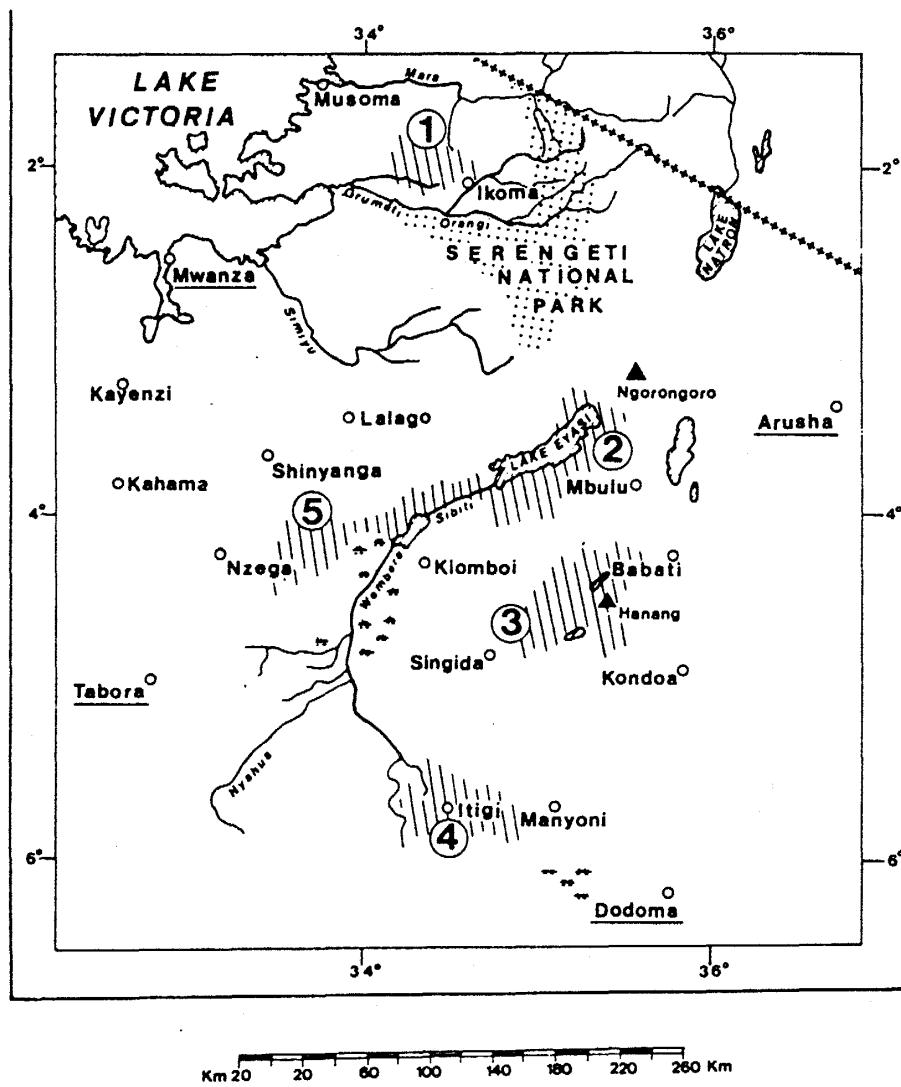
ダトーガ語の子音体系は、今まで未確定になっていた。とくに、閉鎖子音の系列に無声と有声の対立が存在するかしないかが明らかではなかった。この点にかんしてロットランドは、閉鎖子音の無声と有声の対立がはたす音韻論的機能は低いと指摘しながらも、動詞の活用においてなどどうしても閉鎖子音の無声と有声の対立を認めざるをえないと考えている（Rottland, 1982:154）。梅棹もロットランドと同様に、閉鎖子音の無声と有声の音韻的対立の有無に疑いをもちながらも、その対立の有無について問題解決が不能であるいじょうは、閉鎖子音に無声と有声を区別して記録するという立場をとっている²。エーレトは、ダトーガ語の子音体系に口蓋垂音/q/をのぞいて有声閉鎖音を設定して、無声閉鎖音を認めない（Ehret, 1972）。エーレトは、1例をのぞいて無声閉鎖子音を記録していない³。しかしエーレトは、音素である有声閉鎖子音が音声的になぜ無声閉鎖子音として発音されるのかを説明していない。一方、ロットランドは、閉鎖子音の無声と有声の対立を認めざるをえないしながら、形態素の境界で発生した有声閉鎖子音の連続に来源をもとめることが可能な無声閉鎖子音を想定している。たとえば、ロットランドは、/rabɛ:ka/ 「涙、pl.」を名詞語幹 *dabɛ:g-* と接尾辞 *-ga* に分析し、形態素の境界で有声閉鎖子音の連続 /gg/ が無声閉鎖子音 /k/ になるとを考えている（Rottland, 1982:154）。しかし、ロットランドは、無声閉鎖子音 /p, t, c, k/ をすべての場合に有声閉鎖子音の連続 /bb, dd, jj, gg/ に置き換えることには反対している。そうすることは、あまりに恣意的すぎるとロットランドは考えている。

本論では、ダトーガ語に閉鎖子音の無声と有声の音韻的対立がないことを主張する。そういうことで、音韻論的にどのような利点があるのかを論じる。また、これまでの議論が陥っていた単純だが、しかし、決定的な誤りを指摘する。

1. 1. ダトーガ語

ダトーガ語は、東アフリカ、タンザニア北西部で話されている。エヤシ湖のまわりとババティの町周辺とムソマの町の郊外とイティギの町周辺で話されている。さらにダトーガ

図1 ダトーガ語地理的変種の分布



Karte 13

Verbreitung der Datooga

- | | |
|-----------------------------|------------------------|
| 1 Rotigenga und Isimijega | 2 Bajuta und Isimijega |
| 3 Gisamijanga und Barabaiga | 4 Bianjida |
| 5 Buradiga | |

(Rottland, 1982, p.43)

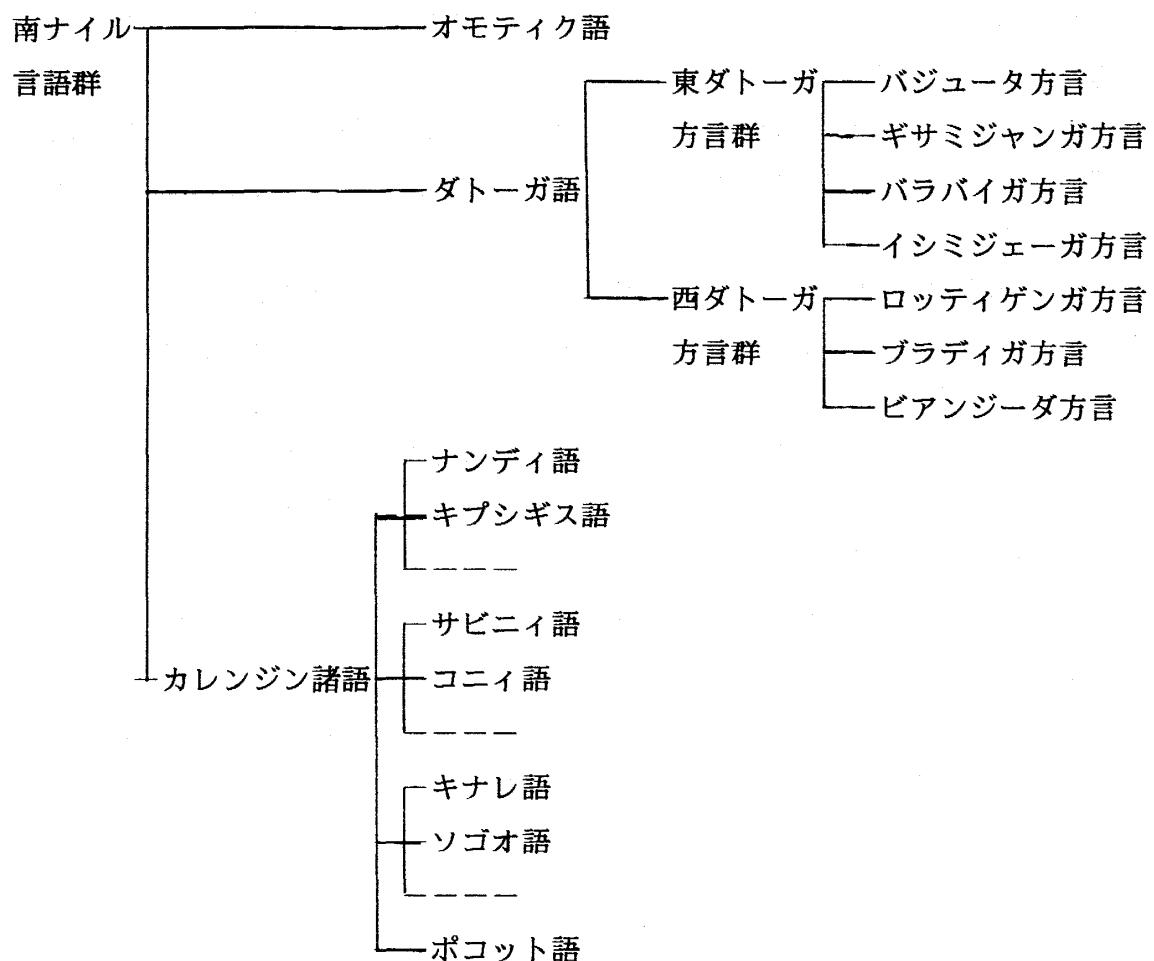
語を話す人々の一部は、タンザニアとザンビアの国境をこえて、ザンビアにまで移動しているといわれている。ダトーガ語の話し手の数は、総計約6万4千人と書かれているが、確かではない (Welmers, 1971:884)。

ダトーガ語は、ナイル・サハラ言語群のなかのナイル諸語に所属し、ナイル諸語のなかの下位分類では、南ナイル言語群に分類されている。ナイル諸語のなかでは、もっとも南に位置する言語である。

ダトーガ語の内部には、地理的変種が存在する。ロットランドの分類では、地理的変種は、おおきく2つのグループ、東ダトーガ方言群と西ダトーガ方言群に分類される。東ダトーガ方言群は、バジュータ方言とギサミジャンガ方言とバラバイガ方言とイシミジェーガ方言からなり、西ダトーガ方言は、ロッティゲンガ方言とブラディガ方言とビアンジーダ方言からなる³ (図2を参照)。ロットランドが使用した地理的変種の名前は、富川が記録した地域集団の名前と同じである。富川は、これらのロットランドが記録した地理的変種の名前以外に地域集団 (Territorial Group) の名前としてダロラジェーガ、ギダゴーディガ、ビシエーダ、ダラグワジェーガ、サラグワジェーガ、グムビエガ、マンガティガ、サラグワジェーガ、ダマルガ、サワスカを記録している (Tomikawa, 1970)⁵。ただし、富川が記録した地域集団が言語的にことなる地域変種を話す集団と一致するかどうかはまだ明らかではない。

ダトーガ語の地理的変種は、地理的分布とかならずしも一致しない。たとえば、同一地域に異なる地理的変種が話されていることがある。これは、ダトーガ語を話す人々が他民族との戦いの歴史のなかで、離合集散をくりかえし、また、頻繁に移動を行なってきたためである。異なる地理的変種を話す人々が、戦いのための大戦闘集団をつくり、転戦をくりかえしてきたからである。

図2 ダトーガ語とダトーガ語の地理的変種の分類



2. ダトーガ語（バジュータ方言）の子音体系

本論は、ダトーガ語の子音体系を明らかにすることを目的としている。ダトーガ語の子音体系といつてもバジュータ方言の子音体系を明らかにすることを目的としている。第1章で書いたように、ダトーガ語には多くの地域変種があり、しかもその違いはかなり大きいと考えられる。これから著者が試みる議論は、あくまでバジュータ方言で可能であって、その他の地理的変種では不可能であるかもしれない⁶。

2. 1. 音声的な無声音と有聲音の分布

ダトーガ語（バジュータ方言）に閉鎖子音の無声と有声の対立が存在するかしないかについて音韻論的な議論をするまえに、音声的なレベルで無声音と有聲音の分布を観察しよ

う。ダトーガ語は、閉鎖子音と摩擦音と鼻音と側面音とふるえ音と半母音からなる単純な子音体系をもっている。鼻音と側面音とふるえ音と半母音は、ダトーガ語においてはまったく無声と有声の音韻論的対立などは問題にならない。これらの子音は、ダトーガ語ではふつうどの環境においても有声性の特徴をもっている。

では、閉鎖子音と摩擦音の音声レベルでの無声音と有聲音の分布は以下のようにまとめることができる。

表1 閉鎖子音と摩擦音の音声的分布

(a) 摩擦音はいつも無声で発音される。

例 [suuyɛnda] 「リカオン」、[gɛɛʃatka] 「歯、複数」

(b) 閉鎖子音は無声音と有聲音で発音される。ただし、その分布には以下のような偏りが観察される。

(1)語頭の位置ではいつも有聲音で発音される。

例 [deedɛ] 「家畜」

(2)鼻音と側面音とふるえ音のあとではいつも有聲音で発音される。

例 [marərda] 「豹」

(3)摩擦音や閉鎖音と連続するとき、無声音で発音される。

例 [bɛʃta] 「象」、[gɛɛʃatka] 「歯、複数」

(4)語末の位置ではいつも無声音で発音される。

例 [bɛʃak] 「象、複数」

(5)母音間では無声音で発音されたり、有聲音で発音されたりする。

例 [iita] 「歯」

例 [ŋadiida] 「ライオン」

まず、摩擦音は、いつもどのような環境においても無声音で発音される。語頭の位置でも語末の位置でも、母音間でも、また、無声閉鎖音と連続するときでも、無声音で発音される（表1の(a)、[suuyɛnda] の初頭の [s] や [gɛɛʃatka] の母音間の [ʃ]）。

一方、閉鎖子音は、無声で発音されるときと有声で発音されるときがある。語頭の位置ではいつも有声で発音され、また、鼻音や側面音やふるえ音のあとではいつも有声で発音

される（表1（b）の(1)、[deedɛ] の初頭の [d]、表1（b）の(2)、[marɛrda] の2番目の [r] のあとに [d]）。ところが、摩擦音や他の閉鎖音と連続するときは、無声音で発音される（表1（b）の(3)、[bɛʃta] の [ʃ] や [t] [gɛʃatka] の [t] や [k]）。表1（b）の(3)の環境について注意すべきことは、閉鎖子音が連続するとき連続する閉鎖子音は常に無声音で発音されることである。いいかえれば、有声閉鎖子音と無声閉鎖子音が連続して現われることは、けっしてない。また、語末の位置でも閉鎖子音は、いつも無声音で発音される（表1（b）の(4)、[bɛʃak] の語末の [k]）。

これら上記の閉鎖子音の音声的な発音は、表1の(1)から(4)までの分布をあらわしている。(5)の母音間という環境での閉鎖子音の発音をのぞけば、表1の(1)から(4)までの閉鎖子音の音声的な発音の分布は、無声と有声にかんしていわゆる相補分布をしめしている。つまり、同一の環境で閉鎖子音が無声音で発音されたり、また、有声音で発音されたりすることはない。閉鎖子音はある特定の環境では、かならず無声音か有声音のどちらか一方で発音される。このことから(5)の環境をのぞけば、閉鎖子音は無声と有声の音韻論的対立はないことになる。閉鎖子音が無声音で発音される環境は、図3のように図式化することができる。

図3 閉鎖子音の無声音で発音される環境（ただし、表1の(5)をのぞく）

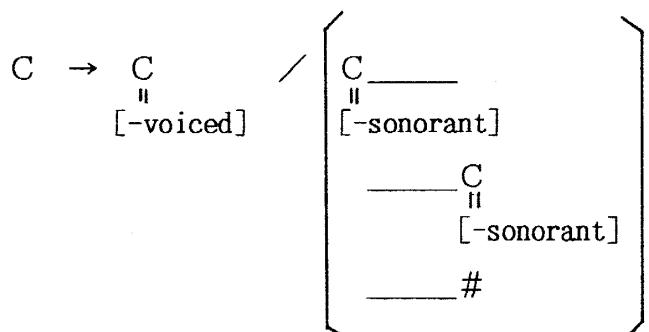


図3における [-sonorant] という特性をもつ子音は、ダトーガ語においては閉鎖子音か摩擦音である。この環境指定は、 [-sonorant] の子音、つまり、閉鎖子音か摩擦音に連続するときと、語末の位置で、閉鎖子音は無声音で発音されることをしめしている。図3以外の環境では、閉鎖子音は有声音で発音される。

問題は、表1（b）の(5)の環境で閉鎖子音が無声音でも有声音でも発音されることである（表1（b）の(5)、[iita] の [t] と [nadiida] の [d]）。もしこの問題が解決でき

ないなら、ダトーガ語の子音体系には閉鎖子音に無声と有声の音韻論的対立が存在すると認めなくてはならない。なぜなら同一の環境において、無声閉鎖音と有声閉鎖音が存在することになるからである。

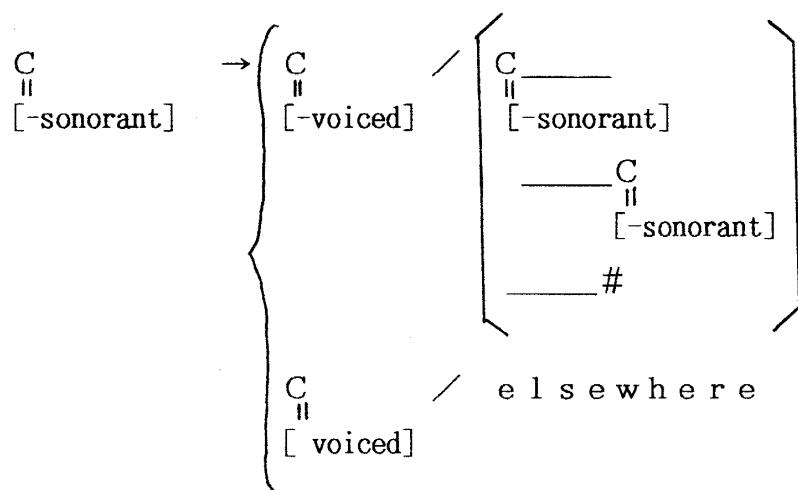
この問題を解決するために、以下のように考える。

音声レベルにおいて母音間で無声音で発音される閉鎖子音を、同じ調音点の閉鎖子音の連続であると仮定する。たとえば、表1の(5)の例、[iita] は、音韻論的には /iitta/ であると仮定する。このように仮定すれば、閉鎖子音 t は連続し、図3の環境指定のなかの閉鎖子音と連続するという指定と一致することになる。そして閉鎖子音 /t/ は、無声音で発音されることになる。

一方、[ŋadiida] は、音素 /t/ が閉鎖子音や摩擦音と連続していないと考えて、図3の環境指定以外の環境なので、有聲音 [d] で発音される。この語を音素表記すれば、/ŋatiita/ と表記することになる。

このように音声レベルにおいて無声音で発音される閉鎖子音を、すべて、閉鎖子音の連続と考えて、閉鎖子音には音韻論的には無声と有声の対立はないと結論する。このとき閉鎖子音は、無声閉鎖音を考えておく。ただし、子音体系のなかで閉鎖子音に音韻論的な無声と有声の対立がないということがわかったのだから、その閉鎖子音が無声音であるか有声音であるか議論することにはまったく意味がない。しかしながら、有声閉鎖子音だけをもち、無声閉鎖子音をもたない子音体系の言語を仮定することは、類型論的に考えてまったく不自然であると考えられる。それゆえダトーガ語の子音体系のなかに無声閉鎖子音を

図4 閉鎖子音の音声レベルでの発音



たてるのである。

閉鎖子音は、音韻論的に条件づけられた変種として、無声音と有声音の変種をもつと考える。その閉鎖子音の音声レベルでの発音の現われを、図にまとめると図4になる。

図4は、閉鎖子音が、その調音点が同じであろうとなからうと、他の閉鎖子音や摩擦音と連続するとき、また、語末の位置では、無声音で発音され、それら以外の環境では有声音で発音されることを示している。

2. 2. 音声的証拠と形態論的証拠

音声レベルで母音間の位置において無声音で発音される閉鎖子音と同じ調音点の閉鎖子音の連続であると考える根拠を2つ、指摘する。

第1に実際の発音を注意深く観察すると、たとえば、/iitta/ [iita] の閉鎖子音 [t] は、2重子音 [tt] に聞こえる。この事実は、梅棹（1990）にもRottland(1982)においても指摘されている⁸。

第2にこの /iitta/ [iita] は、形態素に分析すると、名詞語幹 iit- と定名詞単数形をつくる接尾辞 -ta からなることが分かる。これは、同じ名詞の複数形をあわせて考えるとよく分かる。複数形は、語幹 iit- と複数の接尾辞 -i- と定名詞複数形をつくる接尾辞 -ka からできている。この場合、音素 /t/ は、複数の接尾辞 -i- によって閉鎖子音の連続をつくることを阻止されている。その結果、実際に [iidiga] と音素 /t/ も /k/ も有声音で発音される。

また、人名に [gitiyanga] がある。これを形態素に分析すると、人名によく接辞する接頭辞 [gida] /kita-/ と動物を意味する [diyanga] /tiyanka/ からできていることが分かる。この接頭辞が語幹に接辞するとき、接頭辞の末尾の母音が脱落して、その結果、接頭辞の末尾の子音 /t/ と語幹の初頭の子音 /t/ が連続することになる。これを音韻論レベルで表記すると、/kit-tiyanka/ と表記できる。そして、閉鎖子音が連続するという図3の環境指定に合致することになり、閉鎖子音の連続 /tt/ は無声音 [t] で発音されることになる⁹。

2. 3. 閉鎖子音の連続と考えることの利点

音声レベルで無声音で発音される閉鎖子音と同じ調音点の閉鎖子音の連続であると考えて、これら音声レベルでの無声音をすべて、閉鎖子音の連続で表記し、閉鎖子音には音韻

論的な無声と有声の対立がないとすることは、実際には、音声レベルで無声音で発音される閉鎖子音を無声閉鎖子音と考え、また、有声音で発音される閉鎖子音を有声閉鎖子音と考え、閉鎖子音に音韻論的な無声と有声の対立があるとすることと、まったく違はないと思われるであろう。つまり、音声レベルでの無声閉鎖子音を無声閉鎖子音の2重子音、CCで表記し、有声閉鎖子音を無声閉鎖子音、Cで表記することは、ただ表記のしかたを書きかえただけで、なんら問題を解決していないように思われるであろう。しかし、音声レベルで無声音で発音される閉鎖音と同じ調音点の閉鎖子音の連続と考えることがもたらす利点がある。

第1に、音声レベルで母音間の位置において無声閉鎖子音があらわれる頻度が低いこと説明することができる。なぜなら、同じ調音点の閉鎖子音が連続した場合にのみ、音声レベルで無声閉鎖子音が母音間の位置にあらわれるのだから、無声閉鎖子音が母音間であらわれる確率は、同じ調音点の閉鎖子音が連続する確率ということになる。これを単純に計算すると、子音と母音の数を合計した数、22分の1の確率ということになる。ただし、当然、この子音の数には、有声閉鎖子音の数は合計に入れない。これでは無声閉鎖子音が母音間の位置で、音声レベルにおいてあらわれる頻度が低いのは当然であると考えられる。

第2に、語頭の位置に無声閉鎖子音が音声レベルであらわれないことが説明できる。図4でみたように語頭の位置では、閉鎖子音はいつも有声で発音されるからである。また、逆に、閉鎖子音が連続するのはもっぱら形態素の境界であると考えられるので、語頭の位置では無声閉鎖子音が音声レベルであらわれないという事実と一致する。

第3に、歴史言語学の観点からみれば、南ナイル言語群のなかでダトーガ語の子音体系を再考することができる。

ダトーガ語の子音体系は、閉鎖子音に音韻論的に無声と有声の対立がないこととして、図5の(b)のように書くことができる。対照するためにダトーガ語の従来の子音体系を図5(a)に、カレンジン諸語の子音体系を図5(c)に並べておく。

図5の(a)は、従来のダトーガ語の子音体系の記述である。図5の(c)はカレンジン諸語の子音体系の表である。従来のダトーガ語の子音体系の表では、有声閉鎖子音、/b/、/d/、/j/、/g/が含まれていたが、それらをすべて表(b)では排除することができる。このように有声閉鎖子音を子音体系のなかから排除すると、表(b)と表(c)を比較して容易に分かるようだ、ダトーガ語の子音体系と南ナイル言語群の他の言語、たとえば、カレンジン諸語の子

音体系とはきわめて似ていることが分かる。

図5 ダトーガ語の子音体系

(a)ダトーガ語（従来）	(b)ダトーガ語	(c)カレンジン諸語
/ p t c k q	/ p t c k q	/ p t c k
b d j g		
(f) s ʃ	(f) s ʃ	s
l	l	l
r	r	r
m n p ñ	m n p ñ	m n p ñ
y w /	y w /	y w /

ダトーガ語とカレンジン諸語の子音体系の違っているところは、閉鎖子音が音声レベルにおいて無聲音と有聲音で発音される環境の違いにある。この環境の違いを明らかにするために、カレンジン諸語において閉鎖子音が無聲音と有聲音で発音される環境を、カレンジン諸語に所属するそれぞれの言語の細部の違いを無視すれば、以下にまとめることが可能である。

表2 カレンジン諸語における閉鎖子音の音声的分布

(a)閉鎖子音は無聲音と有聲音で発音される。ただし、分布には以下の偏りがある。

(1)語頭の位置ではいつも無聲音で発音される。

例 ナンディ語 [kɔ:n̥da] 「目」

(2)鼻音と側面音とふるえ音のあとではいつも有聲音で発音される。

例 ナンディ語 [ke:lðʌ] 「足」

(3)摩擦音や閉鎖音と連続するとき、無聲音で発音される。

例 キプシギス語 [kipsigis] 「キプシギス」

(4)語末の位置ではいつも無聲音で発音される。

例 ナンディ語 [ingɔ:k] 「ニワトリ」

(5)母音間では有声音で発音される。

例 ナンディ語 [kɪ:bʊt] 「落ちる」

カレンジン諸語に所属する言語のなかには、硬口蓋閉鎖音 /c/ が母音間でも無声音で発音されたり、あるいは、自由変異として無声音と有声音の両方で発音される言語が存在する。しかし、細部の違いを無視すると、閉鎖子音の音声的分布は表2でまとめたものでよい。¹⁰

閉鎖子音の音声的分布について、カレンジン諸語のそれとダトーガ語のそれとの違いは、語頭の位置での発音の違いだけである。カレンジン諸語では、語頭の位置で閉鎖子音は無声音で発音されるが、一方、ダトーガ語では閉鎖子音は有声音で発音される。

ダトーガ語とカレンジン諸語の子音体系の違いは、たんに閉鎖子音が音声レベルで無声音、あるいは、有声音で発音される環境が違うだけである。それをスケールであらわすと図6になる。

図6 閉鎖子音が無声音と有声音で発音される環境のスケール

言語	ダトーガ語		カレンジン諸語	
環境	C [-sonor]	—# [-voiced]	#—	V—V [+sonor] [+voiced]
無声／有声				

図6のスケールは次のことを表しています。ダトーガ語では摩擦音と閉鎖音に連続するときと語末の位置で、つまり、スケールにおける縦の一本線の左側の環境では、閉鎖子音は無声音で発音され、語頭の位置と鼻音や側面音やふるえ音のあとや母音間では、つまりスケールにおける縦の一本線の右側の環境では、閉鎖子音は有声音で発音される。カレンジン諸語では摩擦音と閉鎖音に連続するときと語末の位置と語頭の位置で、つまり、スケールにおける縦の2本線の左側では、閉鎖子音は無声音で発音され、鼻音や側面音やふるえ音のあとと母音間では、つまり、スケールにおいて縦の2本線の右側の環境では、閉鎖子音は有声音で発音される。

図6のスケールは、有声性の一般的スケールとほぼ一致している。スケールの右へいく

ほど有声性がたかくなっている。有声性のたかい要素と連続すると、閉鎖子音はより有声音で発音される可能性が高くなる。ダトーガ語の閉鎖子音もカレンジン諸語の閉鎖子音もその音声レベルでの発音のされかたは、この一般的的傾向に一致している。ただし、どの環境から有聲音で発音されるかの境界が、ダトーガ語とカレンジン諸語とでは違っているのである。

3.まとめ

まとめにかえて、ダトーガ語の単語をこの論文で提案する子音体系にのっとって、音素表記にして書き、カレンジン諸語と比較してみよう。ここではキプシギス語にカレンジン諸語を代表させる。表3において、ダトーガ語の鍵括弧でくくられた表記は、音声レベルでの表記であり、従来のダトーガ語の表記はこれにはほぼ近いものと考えてよい。斜線でかこったのが、本論で主張した子音体系にのっとって音素表記したものである。

表3 ダトーガ語とカレンジン諸語との比較

ダトーガ語 音声表記	ダトーガ語 音素表記	キプシギス語
「ゾウ」 [bɛʃta]	/pɛʃta/	peelyaat
「家畜」 [deedɛ]	/teetɛ/	tɛɛta
「耳」 [iita]	/iitta/	iitit
「子供」 [jeftɛ]	/ceftɛ/	ceepṭa (「少女」)
「歯」 [gɛɛʃadɛɛda]	/kɛɛʃatɛɛta/	kɛɛl tɛt

表3においてダトーガ語の音素表記とキプシギス語を比較してみると、閉鎖子音はほぼそのまま対応していることが明らかになる。たとえば、ダトーガ語 /p/、/t/、/c/、/k/にたいして、キプシギス語はそれぞれ、/p/、/t/、/c/、/k/が対応している（それぞれの対応例は、/p/ が「ゾウ」、/t/ が「家畜」、/c/ が「子供」、/k/ が「歯」である）。ダトーガ語の摩擦音 /ʃ/ は、どうもキプシギス語の側面音 /l/ と対応している。また、ダトーガ語の定名詞単数形は、接尾辞 -da/-ta で終わっている（たとえば、「ゾウ」の [-ta] と「家畜」の [-da]）。従来の研究ではこの接尾辞は、2つの形式をもつことに

なっていたが、本論文のように子音体系を設定すれば、ダトーガ語の定名詞単数形をつくる接尾辞を -ta のみであると決定することができる。そして、それはキプシギス語の名詞第2单数形をつくる接尾辞 -It とよく対応する。

このように本論文で試みたようにダトーガ語の子音体系を設定することによって、今まで、南ナイル方言群のなかで閉鎖子音に無声と有声の対立が存在するかどうか明らかではなかったダトーガ語が閉鎖子音に無声と有声の対立が存在しないことが明らかになったことで、あえてダトーガ語の有声子音の来源をさぐる必要はなくなった。また、閉鎖子音が音声レベルでどのように発音されるかについての、ダトーガ語と他のカレンジン諸語との違いは、図6のスケールであらわされる程度の違いでしかない。このことから、ダトーガ語が他のカレンジン諸語から歴史的にわかれたのは、さほど遠い昔のことではないと考えられる。さらに詳しくダトーガ語を研究すれば、南ナイル言語群の歴史を明らかにできるであろう。

注

(1) 本研究は、文部省科学研究補助金（課題番号 08041015）により可能となつた。調査は、1996年11月と12月の行なわれた。調査地は、タンザニア、アルーシヤ県、マンゴーラ村である。

(2) 梅棹、私信。

(3) Ehret, 1972, p.120になぜか無声閉鎖子音をもつ單語が1例、記録されている。
kunio:d 'mortar' がそれである。これ以外に無声閉鎖子音をもつ語は記録されていない。

(4) 詳しくは、Rottland, 1982を参照。

(5) ダトーガの社会組織は、地域集団の連合体からなっている。氏族は、地域集団を横断するように、同じ名前の氏族が異なる地域集団のなかに存在する。たとえば、aという名前の氏族をXという地域集団のなかにもYという地域集団のなかにも見つけることができる。

(6) ギサミジャンガ方言の小さな記述が、Rottland & Creider, 1996に見つけることができる。これと著者が調査したバジュータ方言の記述のあいだにも違いを見つけることができる。

(7) ダトーガ語では、語末の位置で母音が自由変異として脱落することがある。この母音脱落の結果、表1 (b) の(4)のように、語末の位置で閉鎖子音は無声音で発音される。

(8) Rottoland, 1982, p. 154では、閉鎖子音 /t/ と /k/ は2重子音が観察されるが、しかし、/p/ と /c/ は2重子音は観察されないとしている。

(9) /kit-tiyanka/ の閉鎖子音の連続 /tt/ は、けっして2重子音 [tt] のように長く発音されることはない。閉鎖子音の連続が長く発音されるには、なにか別の音声的な要因があると考える。

(10) カレンジン諸語における閉鎖子音のおもな異音は、以下のとおりである。

(a) 鼻音と側面音のあとではすべての閉鎖子音は、有声で発音される。

(b) 母音間とふるえ音のあとでは、両唇閉鎖子音 /p/ と軟口蓋閉鎖子音 /k/ は有声で発音される。

(a)と(b)の異音はカレンジン諸語に属するすべての言語で同じである。

(c) 齒茎閉鎖子音 /t/ と硬口蓋閉鎖子音 /c/ はカレンジン諸語に属する言語のあいだで発音に違いがある。

ナンディ語とキブシギス語・・ /t/ と /c/ は母音間とふるえ音のあとで無声で発音される。

ケヨ語・・ /t/ は母音間とふるえ音のあとで無声で発音される。/c/ は母音間で無声で発音される。

北トゥゲン語・・ /t/ は側面音のあとで無声でも有声でも発音される。

マルクウェタ語・・ /t/ は母音間とふるえ音のあとで無声で発音され、/c/ はふるえ音のあとで無声で発音される。

サビニイ語・・ /c/ は初頭の位置でも有声で発音される。

コニイ語・・ /c/ はふるえ音のあとで無声で発音される。

参考文献

Ehret, Christopher. 1971. *Southern Nilotic History*. Evanston, Northwestern University Press.

Rottoland, Franz. 1982. *Die Südnilotischen Sprachen*. Berlin, Dietrich Reimer.

Rottoland, F. & Ch. Creider. 1996. 'Datooga Nominals: the Morphologization of